

## 夢って、ゆら ゆら

映画って、素敵だね。同じ方向を向き、一つのことを、暗闇の中で、皆で見る。ある時、2歳の孫の諒太がフェリーニ監督の『道』をDVDを見た。「かわいそうな、おねえちゃんのえいが、みたい…。」と、我が家の玄関の戸を開けると、そこに立ったままいつも言った。香光乃は「うさぎさんのえいが、みたい!」。慧太は今でも「クマの映画、やって!」と言う。それぞれのお気に入り。その3人が、今年の映画会で、声をそろえて言った。「『裸の島』がよかった」と。大人は、「こんな時代のこと、分からないんじゃない?」と。そうではない。わかるのではない。小さな子どもだからこそ、自然の中から生まれ出た、その感覚の鋭さが、心の中に映すのだ。子どもたちを見ていて、そう思う。映画を見ていて、そう思う。今回の上映作品『埋もれ木』は、「私たちはもっと自由で、もっとところ豊かであっていい」と。監督の映画は、いつもそう、近代都市の上には、成り立たない。見失いそうで、どこかに紛れこみそうな、人や物の佇まい。山や川、月や木々…、光や影。画像は時代を描いて、深く力強く美しく、ふるえる。「夢って、ゆらゆら」。見ているものに、問いかける。

こうして、私たちは、8年も監督の感覚にふれてきた。これは凄いこと。その監督が、「埋もれ木」から10年。待望の映画『FOUJITA』を完成。どの映画も、誰にも表現できない小栗映画だけれど、この作品は、特別。「監督は、この映画を作るために、生まれてきたのですね。」と監督に伝えたい。いつかこの日がくると皆で希っておりました。戦後70年。10月29日は監督70歳の誕生日。この世のものとは思えないものが映画で表現できるとしたら、『FOUJITA』は、まぎれもなく、監督の『映画は夢』そのもの。どうぞ、皆様、劇場でごらんください。あなたのゆらゆら揺れる感覚の中で。楽しんでいただきたい至宝の映画。監督、おめでとう。

映画を作る人、上映する人、見る人、「第8回邑の映画会」。どうぞ、ごゆっくり、お楽しみください。

邑の映画会実行委員会会長 アーティスティック・ディレクター 加藤 一枝